

---

# 六週間の子育て日記

睦月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

六週間の子育て日記

### 【Nコード】

N3664D

### 【作者名】

睦月

### 【あらすじ】

ごく普通の男の子、ひろきは庭で草むしりをしていたある時、小さなたつまきを見つける。その竜巻が消えた後には雑草で出来た鳥の巣のようなものが残されていた。ひろきが育てた不思議な赤ちゃんの子育て日記を見てみたいと思いませんか？

(前書き)

初めて書いた作品なので、色々と変な所があるかも知んですが、見逃してください。すみません m ( ) ( ) m

## プロローグ

ザーー。ビュオー。

雨が窓を叩く。風が叫び狂う。

「台風10号は、非常に強い台風です。」

ぼくの部屋で天気お姉さんは、すでにわかっている事を何度も繰り返す。

「このまま上陸して、明日には北へそれるでしょう。」  
へえ、それはよかった。

「繰り返します。台風10号は、非常に強い台風です。お出かけは控えて下さい。」

繰り返さないでいいよ。

第一、言われなくてもこんな日にお出かけしないよ。どこ行くんだよ。びしょびしょになるだろ。

プツン

ぼくは天気お姉さんを消した。

夏休み。七月末。もう三日もこんな天気だ。いいかげん退屈した。ベットにごろりと横になり、天井

を見ながら、雨と風の音楽を聞く。正直、うるさい。つまらない。

「つまらない。」  
声に出したところで、誰も聞いてはいない。つまらないから、声を出しただけだ。

別に、つまらなくなるわけじゃないけど。

雨と風の音楽が、ただの叫びに思える頃、ウトウトと眠った。

「あぢいー。」

庭。母さんに命じられて、庭の草むしりをしている。めんどくさい。何で母さんはやらないんだ。自分でやれよ。

今日、やっと雨が上がった。でも、すごく暑い。

「あぢいー。」

あつい。とにかく暑い。

「なんでぼくがやらないといけない……」  
ブツブツ言いながらやっている。

「ん？」

積み上げておいた草が、くるくると回っている。

「うわ？ たつまき？」

たつまきだった。小さかった。小さいといっても、ぼくの背ぐらいはあるけど。

「うっひゃー。」

たつまきのそばにいと扇風機みたいに風を送ってくれた。

「すずしい。」

汗がだんだんかわいていく。ぼくはそこに座ってたつまきをながめていた。

「あれ？」

気のせいかな。だんだんたつまきが弱くなってる？

「あっ、あっ。」

ああ。消える。だんだん小さくなって、小さくなって……

……消えた。

「ああ、おもしろかった。」

草むしりしようとする周りをみると、草がない。

たつまきのあつた方をみると、草が倍ぐらいに増えてつまかさなつていた。

たつまきが、まきとつてしまったんだ。でも、その形は、まるで……

「鳥の……巢？」

その巢の真ん中では草がくるくる回っていた。でも、草が……消えて……く？

巢が、内側からこわされている。こわされた草は、二、三周まわつたあと、姿を消す。

まるで、まるで……そう。

「食べ……られて……る?!」

小さい、たつまきの赤ちゃんが、草をたべている。ぼくはそう思った。

なんだかすごく不思議だった。生き物みたいだった。だからかもしれない。

「つかまえて、飼おうかな。」

と思った。そう思って、かぶつてたぼうしをとると手に持ち、えいっと赤ちゃんにかぶせた。

パサツ。ブーン、ブーン。

見事につかまえられた。ものすごくびっくりした。

だって、普通、たつまきつて、つかまえられないからね。

虫かごに入れて、その辺の草をぽいと入れた。

またびっくりした。だって、さわれるんだから。

「これつて、たつまき？なんでつかめるのかな？こついう生き物？」

やたらに「？」を頭に浮かべ、部屋に戻った。虫かごは、机の上においた。

「ひろきー。昼ご飯はー？」

「食べるよ！食べる！」

ぼくは虫かごをそのままにして、下へ降りていった。

「ああ、おいしかった。」  
部屋のドアをパツと開けると、机の上に空っぽの虫かごが置いてあった。

いや、空ではない。よく見ると、弱弱しくなった小さなたつまきが入っていた。

「ああっ！！」  
すっかり忘れていて、今思い出した。

「死んじゃう！！」  
とっさにそう思った。

「どうすれば助かる？」

どうすればいいんだ？ そうだ、生物図鑑だ！

でもよく考えると、たつまきの事が生物図鑑に載っているはずがない。

こいつはたつまきなんだ……。

「たつまきのできかたの本が、あったかな……！」

本棚から「天気について」という本を取り出し、  
たつまきについて調べた。が、

「載ってないぞ……？」

ならば、「台風」だ！

「あつたぞ！」

このような惨害をもたらすが、豊かな土などを運んできてくれるんだ。

こんなのもいいんだ……！！

台風は熱い空気が集まってできるんだよ。

熱い空気……？ 熱い空気をあてれば、大きくなるのか……？  
物はためしだ！ ぼくは階段をダダツと駆け下りて、  
リビングのドアを乱暴に開けた。

「母さん、ライターと、ろうそくは……！」

きよとんとして、母さんは、

「ライターなら、ひきだしにあるけど……」

「ろうそくはっつ!!」

「キッチンに……。ねえ、なんに使うの??」

その言葉が終わらないうちに、ひきだしの中のライターをつかみ、ドアを閉めないまま、キッチンに向かって走り出した。

キッチンの引き出しを乱暴に次々と開けていくと、

「あつた……!」

紫色の細長い箱に四角い窓がついていて、

そこから白いろうそくが見えていた。

『徳用ローソク』

「よし!!」

箱ごとろうそくをつかみ、

どたどたと二階に上がった。

部屋に入り、たつまき、いや、台風が逃げないように

ドアを閉め、窓も閉めて、鍵をかけた。

少々暑いがかたない。

そばにあつた缶のフタをひっくり返し、

その上でろうそくに火をつけた。

ろうを少したらし、その上にろうそくをくつつける。

オレンジ色の火が、ゆらゆらとゆれる。

「大丈夫か……?」

台風にはなしかけながら、ゆっくりとむしかごをあけ、つかんだ。ろうそくの上で放してやった。

ブーン……。

うなりながらも、しっかりと熱い空気を巻き取っている。

ふと虫かごを見ると、さつき入れてやった草が入っていた。

「草は食べないのか……」



不思議と涙が出てきた。

「ごめんな……。お腹すかせて……。」  
なにいつてるんだ……。これは台風だぞ……。?  
生き物・ペットじゃないんだぞ……。? 何で話しかけてるんだ・?  
?

でも、ぼくは話しかけるのをやめなかった。

「お前を育ててやるぞ。母さんには内緒な。」  
フーン…フーン…。

台風はうれしそうにぼくのまわりをまわった。

ゆらゆらと目の前でおどりながらお礼をいつているようにも見えた。  
「そんなにうれしいのか……。」

と、その時、台風がはじかれたようにドアの方にふりむいた。

そして信じられないほどのスピードでろうそくの上まで行き、風を  
おこして炎を消した。

と、思うと、あっという間に台風は消えた。

「あれ……?」

と思つたら、そのとたんにドアが開いてお母さんが現れた。

「ひろきいー!!! 火をなんに使うのっ!!!」

相当怒っている。

「い……。いや……。自由研究に……。使う……。」

「何の?」

「ん……。ほ……。保温性に優れた……。材料につい……。て」

ぼくはとっさにうそをついた。

「ふうーん……。? 本当……。?」

「うん。本当に決まってるじゃん。」

「あら……。そう? とにかく……。大人がいない時は、火い使っちゃ  
あだめ。分かったあ?」

ぼくはしかたなくこくりとうなずいた。

「返事!」

すかさず母さんのきびしい声が飛ぶ。

「はい……。」

「母さん今から買い物いくから。したがって、火も使っちゃあだめ。チャオ！」

母さんは少女趣味なんだ。なにが「チャオ！」だ！36のおばさんめ！！

内心そう思ったが、ここで声にだしたら「何いっ！！」ってなつて、「何がおばさんだ！！ひろきっ！！誰に向かって口聞いてんのっ！！」

で、おしおきになるからここは素直に……。

「うん！いつてらっしやい。母さん！」

ニツコリと笑顔を作つて言った。

「じゃあね。あ、これは没収っ！」

母さんは目の前のろうそくを缶のフタからはがし、ライターをにぎつて楽しそうに出て行った。

ボタン！とドアが閉まるとぼくは

「おーい台風……？」

と小声で呼びかけてみた。

カーテンがゆらゆらとゆれているのに気がついた。

「台風……？」

そおつとカーテンをめくると、うなりながら回る台風がいた。

「いたいた。」

つかみ出すと、スルリと手からすりぬけて、部屋の中を飛び回り始めた。

ぼくは部屋の真ん中にこしをおろしてあぐらを組んだ。

「ごめんな……。お腹いっぱい食べさせてやれなくて……。」  
ブウーン……。ブウーン……。

残念そうに台風はうなった。

「ほんとにごめんな……。あ、そうだ……。かわりにお前に名前をつけてやるよ。」

ブーンブーン・・・!

台風は、ぼくのまわりを飛び跳ねた。

「そうだな・・・。何がいいかな？第一、お前、男？女？・・・あつ、台風には性別ないのかな・・・？」

いろんな事を考えて、だんだん楽しくなつて来た。

「風太・・・。風大・・・。『風』は入れたいんだよな・・・。いつそそのまま風はどうだ？」

ブウーン!!!

なんだか怒っているようだ。

「分かったよ。じゃあ・・・突風・・・？」

ビュオオオ~~~~!!

本気で暴れ始めた。ぼくの髪の毛の上でまわったので、ボサボサになった。

「分かっているってば!!!冗談だよ、冗談!!!マジになるなよな。」

そこまで言った時、台風はふわつと浮き上がり、風を起こして机の上のレポート用紙を一枚浮かばせて、

自分は鉛筆を吸いつけて、そのまま紙と鉛筆を運んできた。

「書けつてか・・・？」

ぼくは紙の上に良いと思う名前をズラリと並ばせた。

風子 風太 風利 竜・・・などいろいろだ。

「どうだ？ちなみにこの字はな、たつて読むんだ。最初はお前、竜巻みたいだったし。」

すると台風は、鉛筆を立てて持ち、紙の上ですべらせた。

りこうで・・・

よいこで・・・

たよれる・・・

そして頭を「文字ずつ取って」「りよた」と書いた。

さらに「り」と「よ」の間に「う」を入れ、「よ」を小さくしたも

のを

新たに書いた。

……そう……

「りょうた」

台風が自分で望んだ名前、それはりょうただった。

その後、紙の上での話し合いは一時間にも及び、漢字は、

「良太」

に決めた。

「どうだ？ 気に入ったか？」

ぼくはもう良太の父親になりきっていた。

ブーン……ブーン……。

良太はそこら辺をブンブン飛び回った。

「静かにしろよ。母さんが帰ってきたらどうすんだよ。」

すると、良太はドアの前まで行き、バツとふりかえり、超高速で消えたようにかくれた。

「なるほどな。お前が消えた時は母さんのお帰りってわけ？ 良太の

『た』は頼れるの『た』……か。」

そういつてぼくは笑った。

「おい、出て来いよ。」

すると、良太はカーテンのかけからそおっと出てきて、ぼくの前に飛んできた。

「これからは、母さんがいる時に自由研究のふりであっつい空気をたっぷり食わせてやるからな。」

ブーン、ブーン。

「やっぱ、お前は利口だな。言葉が分かるし、感情もあるし……。

「ぼくはいつの間にか、良太を台風じゃなくて、人間として認識していた。」

「お前も、言葉が話せたらいいな。」

その時、母さんが帰ってきた音がした。

「またな。」

そう言っただけは良太を虫かごに入れ、その虫かごをクローゼットの下の方にしまった。

こうすれば、もし母さんがクローゼットを開けても暗がりにかくれて、

中身が見えないだろうと思ったからだ。

そしてクローゼットの扉をほんの少し開けて、光が入るようにした。

「また後であそぼうぜ。」

クローゼットに向かって声をかけた後、ぼくは階下へ下りて行った。

それから数日、母さんに実験だと言ってるうそくとライターを持ち出して

ぼくの部屋で熱い空気を良太に食わせる日々が続いた。

ある日、いつものように母さんに言ってから良太の食事道具を持って部屋に行くと、虫かごから良太を出してろうそくに火をつけた。

「さあ食べよ。」

するとどこからか声がする。

「いただきます……」

誰だ！と身構えると、

「ぼく。」

再び声が出て、それでやっとぼくは、声の主が誰か分かった。

「りよ……良太……お前……しゃべれるのか……？」

「うん。まだ……少しだけど……ぼく、しゃべれるよ。」

「やっばお前、賢いな。」

「あんがと……ぼく賢い。」

それからぼくたちは話をした。たくさんたくさん、話をした。

まだ、まちがっている言葉もたくさんあったけど、  
だいたいのは分かった。

「ぼくはね、ひろきがね・・・草取りしてるときに生まれたの。」  
あの時か。とぼくは思った。

「そんでね。ぼくのかあさんはね、あたたかいつしか、子供を産めなくてね。」

『た』が一個多いなんて事は、ほっというてぼくは話をうながした。  
「なんで?」

「あんね。空気がね、あつたかくないとね、子供が育たないんだからだよ。」

「ふうん。」

「あとね、産む時にはね、力があるでしょ?だからね、食べ物がないと、熱い空気がたくさんないとね、産めないからだよ。」

「それで?良太。お前の母さんはどこに行ったんだ?」

「天国。産んで、ぼくに力くれて、天国に行った。」  
つまり、天気用語で言うところと消滅したってことか。

ぼくが涼しいって思ってた時に、こいつの母さんは死にそうになりながら、

こいつを産んでたって事か・・・。

もっとよく見ておけばよかったな。そして、良太に話してやればよかった。

「で?なんでお前は、生まれたときに草が食べたんだ?」

「あんね、えつとね、人間だって赤ちゃんのときは、ミルク飲むでしょ?」

「ああ。」

「だからね、おんなじでね、赤ちゃんの頃は、熱い空気を噛めないから、噛みやすい草とかね、そういうのを一番に食べるんだ。」

「なるほどな。」

約30分かけて、こいつの身の上、台風の生まれ方、子供を産む直前まではみんなオスだって事を学んだ。

「なんでみんなオスなんだ?」

「一人前の台風になるにはスピードとか・・・威力がないとだめ

でしょ？」

「うん。確かに。」

「だから、力が出る男の方がいいから、あかちゃん産む前にひと暴れしてから女の子になるんだ。」

「いい考えだな。それで、お前の母さんのひと暴れは三日続いたあの台風か。」

「うん。そだと思うよ。」

「ああ……。お前がしゃべれるようになって、色々謎だった事が解決したよ。」

「うん。よかたね。」

話が終わった後、ぼくは良太が食べたろうそくとライターを下へ片付けに行った。

なんか、やっぱり台風なんだな……。と思った。

結局、人間とは違う……。あいつをどうしよう……。とも思った。

それからは、良太もよく話をするようになったので、ひまなときはいつも良太と遊んでいた。

楽しかった。弟ができたみたい、子供ができたみたい……。でも、良太に教わる事もたくさんあったので、

お兄ちゃんができたみたい、お父さんができたみたい、そんな複雑な関係でもあった。

良太と接する機会が増えてきて、えさをやったり、遊んだりする時間も増えた。

そんな事をしていれば当たり前だけど、良太もずんずんてっかくなつて、食べる空気も増えた。

そのうちに、ろうそく一本じゃ間に合わなくなった。

一日に、二、三本必要になって来て、

いよいよ母さんに怪しまれるようになった。

「ひろき。あんた、最近ろつそくが全然なくなつて来てるけど、そんなにろつそく必要？」

ある日、とうとう母さんに問い詰められた。

「あんた、そんなに無駄遣いしてないでよね。地震とか、停電とかになった時困るじゃん。」

「うん……。ごめん。」

「そんな自由研究のために、我が家だけ光がないなんて、嫌だよ？」

「……。」「そんなにたくさん必要なら、自分で買いなさいよ。ろつそく。」「自分で……。？」

「そう。それなら文句言わないから。ね？そうしなさいよ。」

「そんな事言つたつて……。ぼくお金ないし……。」「

「かせぐのよお！」

母さんが当たり前のように言った。

「か……。かせぐう？！」

「そう！母さんの手伝いをして、その手伝いに合ったお金をあげる。」

「

「つまり……。アルバイト……。？」

「うん！一石二鳥じゃない！」

母さんはぼくの目の前で片手を広げ、一本つつ指をおりながら、

「母さんは助かるしい……。ひろきはおこづかいが手にはいるしい……。」「

と言った。

「ね？そう！そうしましよー！」

「え？え、そんな……。」「

「じゃあ、夕飯の仕度の邪魔だから……。」「

と、ぐいぐいぼくをドアの外へ追い出した。

（とんでもないことになつちやつたな……。）

内心そう思いながらぼくは良太のところへ戻った。

「話、何、なんだった？」



もうかなり頭のよくなった良太がそう聞いた。

「うん。お前のえさが、ろっそくのことだけど・・・かなり使ってるだろ?」

「熱い空気、空気のこと?」

「ああ。それでな、お金がかかるから、ぼくが母さんの手伝いをして、お金をもらって、ろっそくを買う事になったんだ。」

「ひろき、働くの?」

「いやいや。働くなんてそんなレベルじゃないけどさ。めんどーくせえな〜!!!」

「ひろき、ごめん、ごめんね。」

「あ?なんで?」

「ぼく、ぼくが、食べるから。空気、ろ、ろそく。」

「え?いやいや、りょうのせいじゃないって。ろそくって、ろっそくの事?」

「空気、食べる、ぼく、いけないよね。」

「え?だから、全然いけなくなてないって。」

よく見ると、良太は、勢いがなくなって、風の速さが遅くなっていた。

「もしかして、りょう、落ち込んでんの?」

「おち、おちこんでる、って、どういう意味?」

「元気がないって事。」

「げ、げ、元気なんて、あ、ある、あるもん・・・!」

どんだん、声のトーンが低くなっている。

しゃくりあげたようなしゃべりかただ。

「お前・・・泣いてるのか?」

「な・・・な、泣いて・・・ない、泣いて・・・なんか・・・な、ない・・・も・・・ん!」

いや、どう見ても泣いてますから。

「なんで、泣いてるんだよ?」

「泣いて、な、ない・・・もん。」

「いや、泣いてるっしょ？」

「だって……だ……って……」

「だって？」

「ひろき……めっ……めんど……めんどく……さ……いって、言  
った……言ったじゃん……。」

「え？そりゃ、言ったけど……。」

「だって、めんど……めんどく……さ……いって……。」

「うん。」

「ぼくの空気……買うの……め……めんど……く……さ……い……い……って……  
いった、いったじゃん。」

「えっ、ち、違うよ、ごめん。そういう風に思ったんなら、あやま  
るよ。」

「う………う………う………。」

「そうじゃなくて、ぼくは、お金を稼ぐのがめんどくさいっていつ  
ただけで……。」

「う………。」

「りょうのろうそくをかうのが、めんどくさいんじゃないかって……  
」

「そ……そ、そうなの？」

「うん。りょうの事は、大好きだよ？」

「ほ……ホント？」

「うん。ほんとだよ。兄弟ぐらい好きだよ。」

「ほんとに？」

「ホントだよ。」

「そ、そうか……。うん。分かったよう。」

「うん。分かってくれたんなら、いいよ。」

ベットにごろりと横になり、天井をながめながら、  
子供みたい。と思った。

頭が良くて、まだ子供だな、と。

(子供なんかじゃないぞ、これは。)

そう思ったのは、あれから、一週間後。

大げんかして、ぼくが怒って下に下りて行ったんだ。

しばらくして、仲直りしようとするうそくとライターをつかみ、

二階に上がり、部屋のドアを開けた瞬間だった。

そこには見るも無残な部屋の様子があつた。

鉛筆立ては床に転がって、シャーペンがころがっていた。

ベットのシーツはこれでもか、と言つほどにめちゃくちゃだった。

机の上は地震が起きた直後のように物が散乱し、

おまけにタンスは、引き出しが全部開いて、

服がその辺にちらばっていた。

それは立派な大人の男の仕業だった。

ポーっとしていたぼくは我に返り、

叫んだ。

「良太!!!何てことするんだ、ここへ来い!!!」

だが良太はここへ来るどころか、返事もせず、身動きもしなかった。

それもそのはず、なぜなら、良太はそこには

いなかった。

いなかったのだ。

「良太?おい、良太。いないのか?」

ぼくは真っ青になった。

あいつが、家出?

そんな、まさか……。

ぼくは机の上の帽子をつかんで、

一目散に玄関へと走っていった。

「ちよっちと行ってくる!」

リビングの方向に叫ぶと、

スニーカーを足にひっかけて、外へ飛び出した。

「ねえ、待って!どこ行くの……!」

後ろからそんな声が聞こえてきたような、違ったような感じだったけど、

無視して、走り出した。

どこっていうあてはなかったけど、とにかくなにかしなければ。とりあえず、公園に行ってみた。

居ない。

はっとした。そうだよ。なにしてるんだ。

あいつは、外へ出た事は一回もないんだ。

だとしたら、不安なはずだ。

こんな遠くの公園に、来るはずないじゃん。

馬鹿だな。何やってんだよ……。

そんなことを思いながら、家の近くまで引き返した。

家の近所をぐるりと囲むような感じで一周した。

やっぱりいない。

それから、また公園に行ってみたり、学校の方まで行ってみたりしたけど、

いなかった。

「くそ！チャリで来ればよかった。」

はあはあと息を切らしながら、そうつぶやいた。

学校の屋上近くについている時計を見ると、一時間たっていた。

「一時間走りっぱなしかよ。」

我ながらびっくりした。スポーツ嫌いのぼくが、マラソンもどきを

一時間……！

でも、びっくりしている時ではない事はわかっていた。

「さがさなきゃ。」

後、30分探して、見つからなかったら、一度家に帰ろう。

まだ探してない、神社や、コンビニの方まで行ってみた。

見つからないまま、もう30分が過ぎた。

「くそ！」

とぼとぼと家に帰った。

「ただいまあ〜」

「お帰り、どこ行ってたの？もう、一時間半よ？」

「ん……。友達の家。」

「うそ言うんじゃないの。友樹君の所に電話したら、お母さんが、友樹はいませんって言ってたよ。」

母さんが親友の名前を出した。

「だから……。それこそ証拠じゃん。ぼくたちは、公園にいたんだから。」

こんな時ばかり頭がいいんだよね。ぼくって……。

「あ……。」

「あーあ。ねえ、もう上がっていい？鬼ごっこして疲れてるんだ……。」

「うん。いいよ。疑ってごめんね。」

いや、母さん。あんたの言ってる事は、正しいよ。

ぼくは部屋に行って、疲れた体をベットにしずめた。

そしてそのまま、眠りに落ちて行った。

眠りから覚めたのは、あれから3時間も経ってからだった。

「う……。」

良太……良太は……？

一目で見える部屋の中には、良太はいなかった。

そうだ、あいつは今どこにいるんだ……。

ぼくは窓辺に立って、外を見回してみた。

「いない……。」

やっぱりいなかった。

これからずっと、良太は帰ってこないのだろうか？

こんなつまらないけんかが原因で、ぼくたちは一生あえないのだろうか？

そう思うと悲しくなってきた。

それから、三日が過ぎた。

ある日、ひよっこり良太が戻ってきた。

二周りほど小さくなつて、勢いがなくなつて、ボロボロになつて戻つて来た。

「ごめん．．．なさい．．．。」

怖い顔でにらんでいるぼくの前で、良太は蚊の泣くような声で謝つた。

「何でこんなに長く家に帰つてこなかった？」

「．．．．．」

「なんでだ？」

ぼくは厳しい声で問い詰めた。

「．．．．．。」

「心配したんだぞ。お帰り、良太。」

「．．．．．ひろき．．．．．。」

「早くお食べ。何にも食べてないだろ？」

ぼくは、ぼくが稼いで買ったろうそくに火をつけ、缶のふたにつけて良太の方に押しやった。

「う．．．うわああああ〜！！！」

良太はいきなり泣き出した。そして、ぼくにだきついてきた。

もつとも、良太に手なんてもんはないから、すり寄つて来ただけだけれど。

「いいから。お食べ。腹、減つてんだろ？」

「．．．．．うん．．．．．クスン．．．．．」

良太はあつという間に熱い空気をろうそく一本たいらげた。

その後、スヤスヤと眠りに入つていった。

でも、何がともあれ、良太が帰ってきてよかった。

そう思いながら、ぼくは、そおつと、下に下りていった。

リビングに入つて、テレビを見て、一時間ぐらいしてから、二階に上がった。

よく眠っている。ぼくは電気を消して、自分もベットに入った。

良太の体は、もう、ぼくより大きいぐらいに育っていた。  
ろうそくの火じゃあ、たりないほどの熱をたべるようになっていっ  
た。

あれからしばらくたってからだった。

後で聞くと、あの時の三日間は、何にも食べていない訳ではなかつ  
たようだ。

でも、何を食べていたのかを聞くと、いつもしよんぼりと肩を落と  
し、うつむく。

だが、なんとなく分かった気がする。

良太の……。良太のいなかった三日間のうち、一番最初の日。

放火があったのだ。隣町の誰もいない、大きな倉庫。そこに、石油  
をまいて、火を放った、そんな奴がいたんだ。

それは、風が強かった事もあり、あつという間に燃え広がり、大き  
な倉庫は一晩で焼けた。

そればかりか、まわりの林に燃え移り、大きな炎となった。

人の少ない所だったから、すぐには通報されなくて、2時間後にや  
つと消防車が到着した。

そういうふうに、ニュースでやってた気がする。

その炎を、良太は食べたのではないか？そういう風に思った。

そればかりではなく、放火をするところを、見ていたのではないか？

放火を止めようともせずに、ただ、自分の食料が出来ることを、喜  
んでみていたのでは……。？と……。

だから、何を食べたか聞いた時に、何にも言わずにうつむいてしま  
ったのではないかと。

深く追求はすまい。するべきではない。戻ってきたのだから。

たとえ、それが、本当だったとしても。事実だったとしても。

たとえ、戻ってきた理由が、食べたエネルギーを使い果たしたから

だとしても。

たとえば、戻ってきた理由が、腹が減ったからだとしても。

本人が反省している。それで……いいのだ。戻ってきたのだから。

「なあ、良太。」

ぼくは、そばで寝転んでいる良太に声をかけた。

「今度どこかへ、力試しに行こうか？」

「……力試しって何だ？」

良太は起き上がりながら、声変わりが始まったような、低い声で尋ねた。

それに、このところ、形も人間っぽくなって、表情とか、ポーズとかも分かるぐらいだ。

「おまえもおつきくなったし。山にでも行って、どのぐらい力があるのか、試すつてのはどうだ？」

「……いいんじゃないかなあ。」

それから、良太は一言もしゃべらずに、またごろんと寝転び、向こうをむいた。

声の事もそうだが、この頃良太は、何もかも変わってしまった気がする。

態度も。性格も。食べる量。それから、すりよったり、あまえたりしなくなった。

そういうもんだと思うけど……。それでも、何か寂しい。

父親って……。こういうもんなのかな？

それから、2、3日してから、約束通り、山へ行った。

電車で、隣町まで行って、バスでミナミダケのふもとに行こうと思っただ。

ぼくは、ろっそくを一箱と、ライター、自分の弁当を持って出発した。



だがひとつ問題がある。体が大きい良太は、立ってるだけでも、周りの人に風がかかる。

家では、部屋でクーラーを弱くきかせて、お母さんが怪しむと、「クーラーだろ。そんな、風ぐらいでびくびくしてんじゃね〜よ!」とどなりつけたが……。

電車や、バスの中じゃそうはいかない。

その事を良太に話すと、

「ふうん。軽い準備運動になるとおもうけどな〜。」  
「といて、びゅんつと、そこを走って見せた。」

その速さにびっくりしたぼくは、

「じゃあ、電車やバスのよこにくっついて走ってくれよ」と頼んだ。で、無事にミナミダケのふもとに着いた。

ふうふういいながら登った。とてつもない暑さだった。

でも、良太がとなりで風を起こしてくれるから、扇風機みたいで涼しかった。

「良太がいると涼しいよ。」

「……ふん。別に、ひろきの為の風じゃないし!」

ぼくはクスリと笑った。強がって見せるのも、まだしたってくれてる証拠。

「この辺にしよう。人に目立たない方がいい。」

「分かった。」

「じゃあ、早速力試しだ。」

言ったとたんぼくはびっくりした。うっかりしてた。

山に行く事ばかり夢中で、どうやって力試しをすればいいか考えていない!

「……しょうがない。そこら辺の木を十本ばかり折ってみなよ。」

「おうよ。」

良太は軽々とやって見せた。暑い日が続いて、水分が無かったからかもしれない。

木はパキリと軽い音を立てて、あっという間に折れた。

「……つぶ！あははははははははははは！」

そのあまりのあっけなさにぼくはなぜか笑えて来た。

「いや、まいったまいった。ぼくがお前をみくびっていたよ。」

実際の所、木を折らせて、トレーニングをさせようと思ったんだが、そんな必要は無いみたいだ。

「じゃあ、ぼくはここに居るから、良太、この町に台風を起こしてみなよ。」

「……それにはエネルギーが要る。」

「なら、その折った木に火をつけてやるよ。こっちへ持ってきなよ。」

「

どきっと、木の束が目の前に置かれた。

ぼくは火をつけた。

「いいか。くれぐれも、くれぐれもだ。この町に被害は出さな。」

ぼくは食べている良太に注意した。

「家を壊したりだとか、川が氾濫したりだとかは、絶対聞きたくない！わかったか？」

「ああ。心配しなくてもいい。俺にはそんな力まだ無いから。」

良太はいつの間にか、自分の事を俺と呼ぶようになっていた。

「じゃ。」

そう言い残して、良太はビュウーンという音と旋風を残し、あっという間に消えた。

ぼくは弁当を広げて、ふもとの町を見下ろしながら食べた。

食べ始めて、十分。町の向こうから、モクモクと黒い雲が、流れてきた。

町全体を覆った黒雲は、やがて台風の目と思われる穴を真ん中に作り、雨を降らせ始めた。

「うわっ！」

ぼくは慌てて、食べかけの弁当をしまった。

木の陰に隠れ、少しではあるが、雨をしのいだ。

「ほええええ……。」

「たいした大きさだ。丸太を十本ばかり食べたからって、あの良太が、あの良太が……。」

「こんなにも大きくなるものだろうか？」

「グオオオオオ！！ビュオオオオオオオオオ！」

「良太はうなり声を上げて、とんでもない風を起こして、かみなりをならし、

そして、雨を降らせた。

十五分ばかり暴れた後、良太は町の向こう側にモクモクと流れていつて、

さらに五分後、ぼくの前に、また、あの旋風を巻き起こしながら、どこからとも無く現れた。

「まあ、ざつとこんなもんよ！！」

「良太は自慢げにそう言った。

「あはははははは！イヤ、たいしたもんだよあ！」

「すごいだろあ？」

「すごい！いや、正直言つて、オメエがココまで出来るとはなあ！」

「ぼくは驚きと誇らしさで目を輝かせながら言った。

「本気になればもつと出来る……。」

「……え？……。」

「本気になれば、俺は、車一台ぐらいは……。つぶせらあ……。」

「……お……お……おい、よせよ。そんな力は、お前がメスになる前のひと暴れに取つとけよ。」

「……ふん。くそ面白くもねえ……。」

「……良太……。お前、約束どおり被害は出してねえだろうな……！」

「心配すんなよ。さつきも言つたろ。まだそんな力ねえって……。」

「そうか……。よかった。」

「せいぜい、森が潰れたくらいだろ。」

「……………つ……………?!」

「見るよう、いい眺めじゃねえか。」

「……………え?!……………」

良太が言う方に、木がなぎたおされている森があった。

「……………お前……………。やめろっていっただろ!?!」

ぼくは半ば泣きそうな顔で怒鳴った。

「大丈夫だよ!ほら、人間の被害は……………ひとつも出してないだろ……………」

良太は、なきそうなぼくを見て心配になったのか、口調が和らいだ。「ばかやろう!?!あの森をどこだと思ってたんだ!?!ひまわり畑がある……………観光名所……………」

言ったとたんぼくは泣き崩れてしまった。

「……………考える!良太!天気予報でやっていたわけでもなく、今までからつと晴れた天気……………」

「……………?……………」

「台風が来るつて、予測できた人がいるもんか!?!」

「なにいつてんだよお」

良太は泣きそうだったが、ぼくは吐き捨てるように言った。

「ひまわりの時期、もう町に少なくなつたひまわりを見に、あそこに行った人たちが何十人いると思ってるんだ!?!?!?!」

「……………!?!?!……………」

「おそらく、何人かは怪我を負つた……………。運悪くすれば……………!」

ぼくはその先を言う事が出来なかつた。

「良太……………!お前のせいだぞ!」

「……………う……………そんな……………」

「お前が!お前がぼくの言う事を聞かなかつたからだ!?!」  
言つたか言わないうちに、

「うわあああああ！……！」

良太は泣き叫んだ。

ぼくはもう言葉にならず、

そしてまた、良太も……。

「……っ！」

部屋のドアを開けたぼくは、呆然と、その場に立ち尽くした。

「……またか……。」

最初の家出から、2週間経っていた。

最初はそれこそ、反省しておとなしくしてたけど……。

ここ1週間というもの、帰ってこなくなつて……。

まともに話しさえしない。

3日前から、それはひどくなって、へやがひんぱんに荒らされるようになった。

そして、良太はそこにいないのだ。必ず。

憂さ晴らしに帰ってきて、ぼくの部屋を荒らして。

そして、今日もそうだった。

「……ちっ……！」

ぼくは舌打ちをしながら、

タンスの中に洋服を押し込んで、倒れているイスを起こした。

結局あの後のニュースでは、被害は少なかったそうだ。

一安心したと思ったら、このありさまだ。・・・最悪・・・

このところ、いきなりの台風が頻繁にやってくる。

ニュースを見るたびに思う・・・。良太だ。

始めのうちは、それこそ猫か犬でも飼っているようなつもりだったけど・・・。

僕はもしかしたら、とんでもないものを飼っているのか・・・？

いや、飼っているというよりは、かろうじて鎖にぶら下がっているという状態か・・・。

もう、疲れた・・・

前々から考えていた事を、実行に移す時が来た。

次だ。次に、良太が帰ってきた時が・・・

・・・別れだ。・・・

ガタアアア                    ン!!!

大きな音がした。二階からだ。

「良太………?」

もしそうだとしたら、言わなければ。

これ以上、家族に迷惑かけるわけにいかない……。

ドタン……ガタ……バタアアア                    ン!!!

僕の部屋からはものすごい騒音がしている。

僕の手は部屋のノブを握るのを嫌がった。

だめだ。言わなければならぬ。

どうせ、もう僕の手には負えない……。

ぐっと力を入れてノブを握って、開けた。

バタ!!!

その瞬間、ピタっと、音は止まった。

「良太………」

「ひさしぶりだねえ……、ひろき………」

そのドスの聞いた声に、ぼくは少々面食らった。

「いいねえ、貫禄が出てきたじゃん。さすが、ぼくの良太………」

「………で?なんか用かあ?………」

「言わなければ………言え………」

「………この家を………」

「言え………」

「出て行ってもらう」

「………はあ?………」

僕は今度はしっかりした声で言った。

「良太、この家を出て行くんだ。もう二度と、ここに戻ってくるな

!!!」

言った瞬間、良太の顔が少しゆがんだように見えたけど、僕は表情を崩さなかった。

きついきつい、鬼のような形相で、良太を睨んだ。

「・・・チツ・・・！」

良太は舌打ちをひとつすると、静かに、こう言った。

「・・・わかった。・・・今まで、ありがとね。・・・ひろき。」

「

その言葉を残すと、良太は窓から、出て行った。

部屋はがらんどうだ。

良太が荒らしていった跡以外は・・・。

「ゴメンな・・・良太。もう少し、いいお父さんになればよかったな・・・。」

荒れた部屋の中に立ち尽くして、

一人ぼっちで立ち尽くして、

そして・・・そして、

少しだけ、泣いた。



## エピソード

そのあと、そろそろ夏休みも終わりの頃……。

大型の台風がやってきた。

日本全土にもものすごい被害を出した、大型の、ものすごく大型の台風。

死傷者が、たくさん、たくさんでた。

日本列島全体が、台風の爪あとでめちゃくちゃだった。

僕たちの住む町以外は……。

台風の威力が弱まって、避難警報が解かれた翌朝。

僕は、町を見て確信した。

良太、ありがとう。

その日の夜、台風は、消滅した。

ぼくは、また、きれいになった部屋に立ち尽くして、

今度こそ、一人ぼっちだと実感して、

良太との思い出を一つ一つ振り返って、

そして……そして、

少しだけ、泣いた。

これは、僕が体験した、世にも不思議な、六週間の、子育て日記。



(後書き)

・・・どうだったでしょうか？

よければ感想お願いします

辛口評価も覚悟してますうゝ) > < (

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3664d/>

---

六週間の子育て日記

2010年12月12日17時33分発行